

4 自然体験の思想的背景に関する研究（個人研究）

関 智子（主任研究員）

キーワード：江戸期、環境思想

本研究は昨年度に引き続き、2年目の個人研究として行ったものである。この課題設定の背景については創刊号でも若干書かせていただいたが、十分ではなかったため、もう一度異なる側面から説明したいと思う。

1. 研究活動の契機

大学に所属しながら約20年の間、私は自然をフィールドとする教育活動に従事してきた。分野を示すと、前半は野外教育であり、後半は環境教育である。このテーマに至る問題意識が生じたのは、自然保護思想の醸成を最優先する自然環境教育の指導に携わっていた後半の時代である。その頃、私は自分の出身地である関東を離れ、青森に赴任していた。

ところで、読者の方々は、自分が携わった教育活動や、あるいは他の人から受けた指導内容に対し、「ねらいや伝えたいことはわかるのだけど、物事の扱いや進め方に違和感がある、なじめない」と感じたご経験はないだろうか。振り返れば、私はこれまでにその両方の経験をたくさんしてきたのだと思う。しかし、違和感の正体は一体何なのだろうか、この研究を始めた数年前ははっきりした正体をつかむことができなかった。

大学に勤めてきた私は、個人的には科学的な考え方や物の捉え方が好きである。ところが、教育活動という他者との共有空間の中で、学生のみならず一般市民、特に大人の方々のコミュニケーションが求められるようになると、それまでの指導経験が通じづらくなるという壁にぶつかってしまったのである。とたんに例の違和感が露わになり、徐々に新しい研究の必要性を感じるようになった。おそらくそれは、よそ者として地域に赴任した時に、大学で使っていた方法を利用して一般市民の方に提供していたことや、反対に青森の地にいながら、文化、風土からかけ離れた、画一的なプログラムを受講したことによる摩擦だったのだと思う。

同じ頃、私は学校教育にも社会教育にも野外活動にも精通している地元のあるベテラン指導者の方とよく活動を共にしていた。この

方は、私が対象者に合わせたつもりで捻り出した企画やプログラムを、いとも容易く、青森型に咀嚼する稀有な力を持っていた。「教育現場で扱うには、(一般化されたコンセプトや法則の)咀嚼が大事だよ、咀嚼が」と、諭されたことを思い出す。

この咀嚼、についてであるが、言葉で聞くほど簡単な作業ではないと私は感じている。咀嚼をするためには、その地域がどのような特性を持っているのかについての理解はもちろんのこと、画一的な理論や法則が示す内容を、参加者の現実問題へと落としこむ応用力が必要となる。もっとも難しい点は、輸入したプログラムの基盤を作る(例えば)科学的思考を、わが国の風土、文化を形成する思考へと、そのクオリティを損なわずに噛み砕くことではないかと思う。

このような教育現場での経験から、私は日本の歴史と思想に着眼することになった。私たちの祖先がどのように自然と接してきたのか、またいつの時代にどのような考え方が主流となって自然との関係において社会が形成されてきたのか、現代の私たちの価値観の中に、古来から受け継がれてきた思想がどれぐらい残っているのかなど、この研究テーマへの興味は尽きない。

2. 環境思想について

約7年間から始めているこの一連の研究において、もっとも重要なキーワードは「環境思想」である。簡単に表現するならば、自然と人間の共生思想ということになる。この研究は、青少年教育、野外教育、環境教育などの現場でおきる様々な現象を扱うタイプのものとは明らかに異なる。また環境思想研究を行うとすぐに現場に役立つのかというと、そうではない。現場とは極めてかけ離れたところに設定されているような印象さえ受けるテーマである。しかしながら、自然体験を利用した様々な教育活動に携わっている私にとって環境思想について考えることとは、あらゆる教育活動を明確な論理性をもたせつつ意味づける行為でもあり、有意義である。

3. 江戸期の思想を環境思想から読み解く

まず、江戸期の思想に現代で言う環境思想に相当する意味内容が、どのように、どれくらい扱われているのかについて検証することにした。環境思想の研究は欧米がリードしているが、先述したような問題意識があったため、日本の古典思想を紐解くことにした。

江戸期は現代社会の原型と言われ、また自然との共生が成り立っていたと評される時代でもある。研究対象は日本思想の専門家の意見を参考にし、次の3思想家を選定した。

熊沢蕃山（1619－1691）

京都生まれ。武士。代表的な著作は『集義和書』『集義外書』。

石田梅岩（1685－1744）

京都生まれ。商人。石門心学の祖。代表的な著作は『都鄙問答』『儉約齐家論』。

安藤昌益（1703？－1762）

秋田県出身。医師。代表的な著作は『自然真営道』。

以上の3思想家は、蕃山と梅岩には儒教思想をベースとする特徴が、昌益には学問・思想・聖人を全否定することによって独自の思想を構築するという特徴があった。これらの思想家による関連著作を読み、その共通点と相違点を考察する作業を行った。

結果を簡単に述べると、三思想家には天地万物一体思想の共通点がみられた。これは自然と人間の一体化思想ともいうべき内容のものであり、身も心も全身全霊をかけて自然に寄り添い、自然の道理に従って生きることを意味していた。彼らが伝えようとしていることは単なる精神論に留まらない。それぞれに生き抜いた舞台上で日々の修練を積み重ねており、その行き着く先に天地万物一体思想の境地を得るといふ実質的な心の変容を著していた。

また彼らはこの思想を核とし、自然の道理に即した「社会・政治思想」「各種実践理論」の考え方を構築していた。このことから、江戸期3思想家は全人的な思想構造を成すことにより、一個の思想として存在することが明らかになった。

4. 今後の課題

江戸時代の思想家を通じて、わが国の自然と人間の関係には確かに自然に寄り添い、自然とともに生きる人生を支える思想が存在することが理解できた。またこれらは単なる観念論ではなく、具現化され、実際行動へと咀嚼され、彼らの歩みに多大な影響を及ぼしていることが読み取れた。

欧米諸国による環境思想に通じる内容が随所に扱われていることから、今後は江戸期思想あるいは近代思想と環境思想の比較検討により日本の環境思想的要素の特性についてさらなる考察が必要であることが指摘できる。また、わが国の自然体験プログラムがこれまで多大な影響を受けてきたアメリカの環境思想との比較からも有益な知見が得られるため、あわせて研究の視野に入れる必要がある。

近年のわが国における青少年教育は、自然体験活動による方法が多方面で利用されている。中には欧米の考え方を採用しているものもあるだろう。その時に、わが国古来の思想の流れがあることを理解しておくことにより、無意識のうちに持っている日本人的感性に触れながら効果的な活動へと発展させることができるのではないだろうか。

今後のさらなる研究に励みたい。

「3. 江戸期の思想を環境思想から読み解く」に関する詳細内容は、日本環境教育学会『環境教育』（平成25年11月号発刊）に、掲載される予定である。

（文責 青少年教育研究センター主任研究員 関 智子）